

平成21年度 研究協力業務実施報告書



平成 21 年 5 月 1 日 解禁日の湯ノ湖

全国内水面漁業協同組合連合会

平成21年度研究協力業務実施報告書

研究協力業務は、独立行政法人水産総合研究センターが自然環境に配慮した水産業の振興を図るために湯ノ湖・湯川において行う試験研究の推進に協力・支援を行う事業である。

本年度も、中央水産研究所内水面研究部の指導のもと、関係各位の協力を得て下記業務を実施した。

1 調査業務（魚類資源動態調査）

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯ノ湖・湯川において釣魚者へのアンケート調査（湯ノ湖・舟・岸合計1,824枚、湯川1,233枚、計3,057枚の回答）を行い、放流及び天然魚類資源の動態や釣魚の実態の把握に努めた。

その釣魚券購入者に対する回収率は表-1のとおりである。今年度は28%（湯ノ湖・舟・岸24%、湯川39%）となり、昨年度より上昇した。

また、回収枚数も、湯の湖・湯川とも増加した。湯川は釣魚者が昨年度より減少したにもかかわらず、145枚の増加となった

表-2と表-3は、湯の湖と湯川の月別回収状況を示したもので、共に月を追うごとに回収率は低くなる傾向がある。

表-1 釣魚アンケート調査票の回収率

年度	14	15	16	17	18	19	20	21
回収率(%)	7	14	17	21	23	25	25	28

表-2 釣魚アンケート調査票の月別回収率（湯の湖）

	5月	6月	7月	8月	9月	合計
釣魚者数	2255	1294	934	1608	1613	7704
調査票回収数	600	290	214	380	340	1824
回収率	26.6%	22.4%	22.9%	23.6%	21.1%	23.7%

表-3 釣魚アンケート調査票の月別回収率（湯川）

	5月	6月	7月	8月	9月	合計
釣魚者数	646	820	535	483	648	3132
調査票回収数	359	360	162	159	193	1233
回収率	55.6%	43.9%	30.3%	32.9%	29.8%	39.4%

2 環境保全業務

(1) 釣り場管理事業の実施により発生するゴミ類の不法投棄防止及び除去

釣魚者に対して、不用となった釣糸・釣針などの釣り具やゴミ等の遺棄について、注意を喚起した。

シーズン終了後の第一土曜日となる10月3日に、湯川の愛好者による清掃奉仕「リパークリーンと懇談会」を計画し、インターネットで15名（昨年13名）の参加申し込みを受けた。当会から6名の合計21名で、川岸や遊歩道沿いのゴミ、木の枝に絡まった釣り糸・フライ等の釣具の除去を行った。

清掃活動終了後、水産研究所が取り組んでいる研究課題に関するレクチャーを受け、意見交換の懇談会を行った。

また、湯川においては釣り人が集中する土・日に、監視業務のかたわら、遊歩道や川辺に散乱するゴミや放置釣具等の清掃を行った。

これらにより、近年、川辺のゴミが少なくなったとの評価を得ている。リパークリーンでも、年々、ゴミの量が減ったと実感している。

一方、湯ノ湖においても、監視業務や釣果情報の収集の際にゴミを除去したほか、10月5日に実施された日光パークボランティアによる湖岸の清掃活動にも協力した。

(2) 湿原立入禁止区域への進入防止の啓発

釣魚者に対して配布するパンフレットに「釣魚心得」の重要事項として、湿原への進入防止を記載するとともに、釣魚券発売所において掲示する等啓発に努めた。

また、湯川エリア内に設置している表示板でも表した。

(3) 釣魚エリアにおける禁煙

日光市環境美化都市に関する条例により、釣魚エリア全体が含まれるラムサール条約登録湿地帯周辺が禁煙エリアになったことから、前出のパンフレットで周知を図るとともに、釣魚券発売所にポスターを掲示し、釣魚券発売時に口頭で釣魚者に伝達した。

(4) 水域環境の監視

湯ノ湖における釣魚者に対して、撒き餌・寄せ餌・生き餌（魚類のみ）・サビキの使用禁止を呼びかけるとともに、常に流域の水環境に注意し、生体持ち出しの禁止についての啓発を行った。

(5) 水質調査

中央水産研究所内水面研究部及び栃木県等が定期的に行っている湯ノ湖の水質調査に機材提供等の協力を行った。

(6) コカナダモの除去活動等への協力

外来種の水草であるコカナダモが湯ノ湖全域に勢力範囲を広げ、ボートの乗り入れや釣りの障害となるばかりか、景観を阻害したり、岸辺で腐敗し悪臭を放ったりと親水環境への影響が顕著になっている。特に終末処理場付近や、湖尻で目立っている。

本年度は、昨年と同様、解禁期間の前期は比較的少なかったものの、夏以降は多く

見られるようになった。レストハウス前から終末処理場付近、湖尻付近を主体に除去作業を行ってきたが、生長が早く作業が追いつかない状況であった。

4月24日に地元自治会や奥日光清流清湖保全協議会が主催する清掃活動に積極的に参加した。

さらに、禁漁期に入った11月9～13日には、昨年同様、湯ノ湖に水草刈取船によるコカダナモの除去が行われた。昨年までは、5日間といっても初日は刈り取り船の搬入、最終日は撤収に充てられ、刈り取り作業は実質3日だったが、本年度は11日8日に搬入、14日に撤収が行われ、正味5日の実施となった。

また、11月16日には中央水産研究所、栃木県及び日光市の職員、中禅寺湖漁協や湯元地区のボランティアとともに、人力による除去を行った。

3 危険防止対策

(1) 水難事故防止対策

日光警察署等の協力・指導のもとに、釣り場における水難事故には常に留意し、継続して監視体制を強化した。また、緊急事態発生の際の連絡体制を策定し、事務所に常時掲示しておくこととした。

本年度は、5月と6月は雨の日が多かったものの、事故の発生はなく、7月以降も大きな台風等による影響はなく事故は発生しなかった。

(2) 犯罪、違法行為防止対策

5月1日の解禁日には、多数の釣り人が湯ノ湖・湯川の釣り場に来場するため、釣魚者間のトラブルや車上荒らしを防止するため、また、立入禁止区域への進入等の発生が予想されたため、日光警察署に防犯パトロール等、特段の協力を要請した。その他、不測の事態の発生に備え、警備会社に周辺のパトロールを委託した。

(3) 駐車違反對策

釣魚者の違法駐車を防止するため、カラーコーン（本会と日光警察署の名入り）を湯滝上の駐車場付近など要所に敷設するとともに、釣り場監視員が巡回し、注意勧告を行った。特に、解禁日の交通渋滞等に対応するため、解禁日前夜から当日にかけて、警察官の指導の下に、重点箇所には臨時交通整理員を配置した。

4 釣り場管理事業

(1) 総釣魚者数

近年、内水面における遊漁者数は全国的に減少傾向を示しているが、当釣り場においてもその傾向にある。平成9年度の26,818人をピークに、利用者は年々減少しており、現在ではピーク時の半分以下まで落ち込んでいる。

21年度の釣魚者数の内訳は、湯ノ湖7,704人（舟4,095人、岸3,609人）、湯川3,132人となり、20年度の釣魚者数を僅かに上回る結果となった。湯ノ湖は舟・岸ともに昨年を上回り、双方合わせて200人以上の増加を見せたものの、湯川の減少傾向が止まらずこのような結果になった。

小学生以下の子供は無料としているが、人数を把握するため釣魚券を発券している。本年の発券枚数は、昨年より23枚多い980枚を発券した。

この数字を加算すると、本年度の釣魚者数は11,816名となる。

(2) 釣り場別釣魚者数

釣り場別釣魚者数は、湯ノ湖が前年度比3.7%増の7,704人（前年7,432人）で、総釣魚者数の71%（前年69%）を占めた。湯ノ湖のうち、舟釣りは前年の3.3%増の4,095人（前年3,964人）で、総釣魚者では38%を占め（前年は37%）、岸釣りは前年の4.1%増の3,609人（前年3,468人）で総釣魚者の33%（前年32%）であった（表-4）。

一方、湯川における利用者数は3,132人（前年3,318人）で、総釣魚者数の29%（前年31%）を占め、今年度は前年比マイナス2ポイントと、減少傾向（昨年は前年比9ポイント減少）に歯止めがかからなかった。その結果、全釣魚者に占める湯川の割合が30%を切った。

今年度は、湯川の釣魚者が約200人の減少となった一方で、湯ノ湖は舟・岸とも増加したため、全体では昨年より若干の増加となり、最も釣魚者数が多かった平成9年度から11年連続で減少の一途を辿ってきた傾向に歯止めが掛かった（図-1）。

表-4 平成21年度湯ノ湖・湯川釣魚者数（子供を除く）

月	湯の湖			湯川	合計	過去の釣魚者数		
	舟	岸	小計			H20年	H19年	H18年
5月	1142	1113	2255	646	2901	2704	3089	3062
6月	653	641	1294	820	2114	2031	2453	2490
7月	488	446	934	535	1469	1661	1330	1656
8月	897	711	1608	483	2091	2125	2253	2339
9月	915	698	1613	648	2261	2229	2059	2372
合計	4095	3609	7704	3132	10836	10750	11184	11919

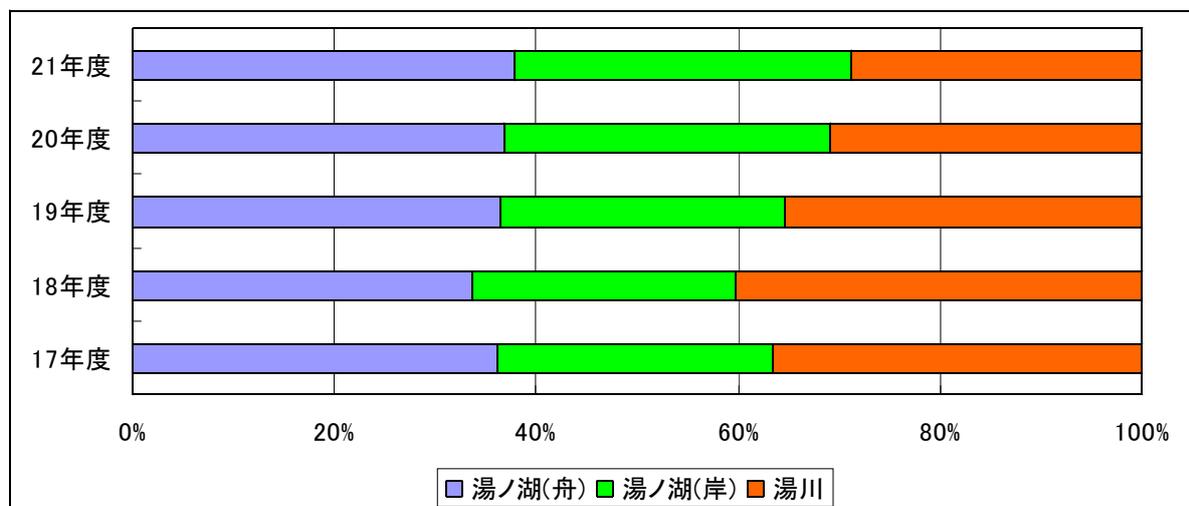


図-1 過去5年間の釣り場別釣魚者割合

(3) 月別釣魚者数

湯ノ湖・湯川における各月別の釣魚者の推移を図-2～4に示した。各月の概況は以下のとおりである。

(ア) 5月

各月の釣魚者数を比較すると、例年の傾向どおり5月の利用者が最も多いことには変わりはない。昨年は2,704人と前年から385人の減少となったが、本年度はやや持ち直し2,901人となり、昨年より197人の増加となった。シーズン全体に占める割合は、27%（昨年25%）となり、19年度と同じ割合になった。しかし、雨の影響があったとはいえ、ゴールデンウィーク後半に1日の釣魚者数が200人を切る日があったため、3,000人は届かなかった。

本年度の解禁は、高速道路の料金が一律1,000円になったことで、より遠くに足が向いてしまうのではないかと危惧していたが、昨年より釣魚者は増加した。ただし、昨年はガソリン価格が5月1日から値上げされたが、本年は比較的安値で安定していたことも影響していると思われるので、高速料金値下げの影響が全く無かったかどうかはわからない。

(イ) 6月

6月は2,114人、シーズン全体に占める割合は20%（昨年19%）となり、昨年より83名の増加となったものの、19年度以前と比較すると回復にはほど遠い状況である。その原因は、湯川の釣魚者が激減したことである。19年度までは1,000人を超えていたものが、昨年から一気に落ち込んでいる。

しかし、その一方、湯ノ湖は好調で、昨年は6月30日の時点で19年より870人の減少となったが、今期は昨年より280人の増加となり、19年度よりも100人近く多い結果となった。

全体で見ると、湯川の不調が響いたために、先に述べたように19年度以前の数字には遠く及ばない結果となった。

(ウ) 7月

好調だった昨年の7月と対照的に、釣魚者は昨年より大きく減少した。湯ノ湖と湯川を合わせて1,469人となり、前年より192人の減少となった。全体に占める割合は14%（昨年15%）となった。湯ノ湖では、土日祝日にニジマスとカワマスの放流を行っているが、6月下旬頃から放流直後に釣れない状態が続き、ヒメマスも不調で30cmを超えるものがほとんど釣れていないことが、釣魚者の評価を下げたと考えられる。特に湯ノ湖の舟釣りの減少が大きかった。

(エ) 8月

8月の釣魚者は、全体で2,091人で19%（昨年19%）となった。

湯ノ湖は7月に続き不調であったが、湯川は昨年より増加となり、唯一、昨年より釣魚者の多い月となった。

湯ノ湖の釣魚者が前年より104人の減少となったのは、7月と同じく、放流後でも釣れない、ヒメマスも釣れないといった状況が続いたためである。特にお盆前の落ち込みが激しく、5月からの累計が一時は昨年を大きく下回る事となった。

一方、湯川は、釣魚者数が昨年より70名の増加となった。

(オ) 9月

9月の釣魚者は2,261人で、全体の21%（昨年21%）であった（表4参照）。9月は湯ノ湖が好調で、舟釣りは6年ぶりに900人を超え、岸釣りは8年ぶりに700人を超えた。

ただし、9月の前半は、天気が悪かったり、敬老の日が下旬にずれたので好調とはいえ、釣り大会を実施した19日からシルバーウィークで一気に盛り返した。釣り大会と大型連休に向け、大型のニジマスの放流を前倒しして12日に行い、これを積極的にPRするなど集客に努めた。

一方、湯川は約100人の減少となった。

(カ) 総括

5月から9月の5カ月間の釣魚者数は11,816人（大人10,836人、子供980人）となり、前年度より109人の増加となった。

本年度は、5月の釣魚者数に回復の兆しが見られたものの、未だ3,000人を切っている状態である。20年度は、5月1日からガソリン代が値上がりにより出鼻をくじかれた感があったが、本年度はガソリン代は解禁当初から禁漁になるまで落ち着いていた。高速道路の料金が、土日などに一律1,000円になったことによる影響については、次のように考えている。5月は昨年より釣魚者が増えたが、これは20年よりもガソリン価格が安値で安定していたことも影響していると考えられ、高速料金が1,000円になったことがどの程度の影響を与えたかはわからない。8月のお盆の時期は、東北自動車道の渋滞状況から推測すると影響は無視できず、より遠方に出かける傾向が強かったと思われる。

一方で、釣魚者の減少に歯止めが掛からないのが湯川である。昨年は、4月に実施された資源調査で資源が少ないことが懸念され、解禁後の釣果も今ひとつであったが、今期は資源調査では19年に近い数値で、シーズン中も比較的良く釣れていて、かつ型も良かったようであるにもかかわらず、釣魚者の減少傾向は止まらなかった。平成14年にキャッチ&リリースになって以来、湯川は常連の釣り場となっているように感じられる。湯川は、その歴史的な背景から「わが国のフライフィッシング発祥の地」とか「フライフィッシングの聖地」などと言われており、また、その河川環境も一般的な渓流域とは異なっている。これらのことが、初心者やまだ湯川を訪れたことのない人を敬遠させている一因となっている可能性が考えられる。さらに深刻なのが、最近ではフライフィッシングの人气が低迷していることである。特に若い世代で人气が無いことが問題である。

また、最近の特徴として回数券の売上げが、年々、減少している。これは単に1人当たりの釣行回数が減ったということだけでなく、6人以上のグループで来る釣魚者が減っていると釣魚券発売窓口で感じていることを暗示している。

そのほか、週間天気予報で週末が雨の予報の場合、実際には週末に雨が降らなくても、釣魚者数が減少する傾向があるように見受けられるのは、本年度も同様である。

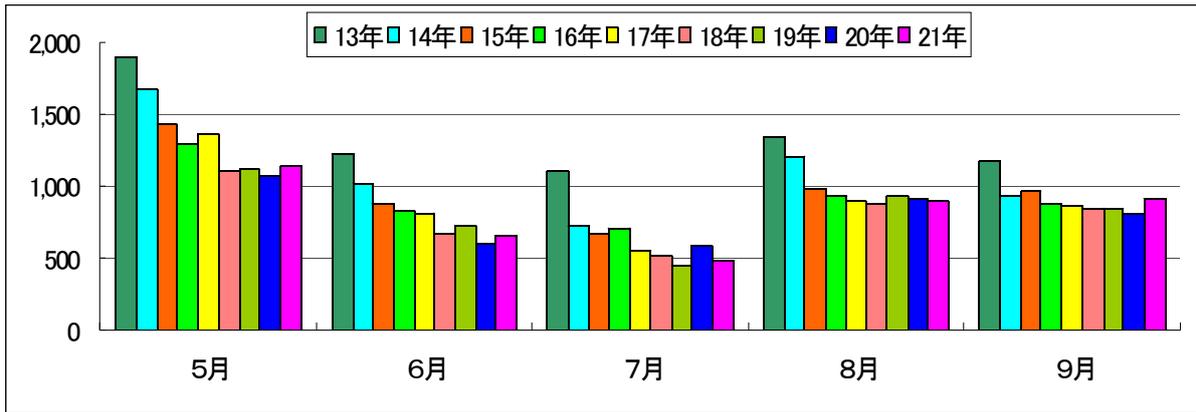


図-2 湯ノ湖（舟釣り）における月別釣魚者の推移

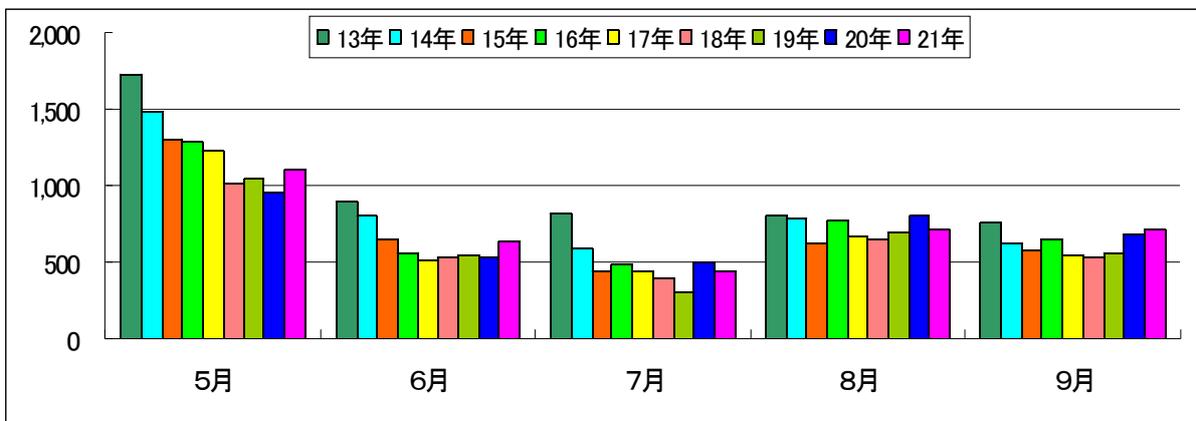


図-3 湯ノ湖（岸釣り）における月別釣魚者の推移

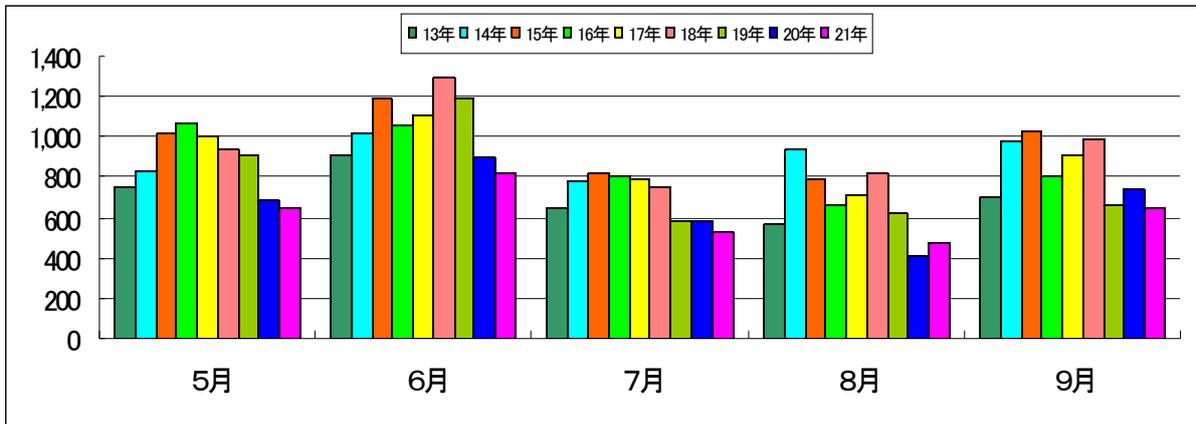


図-4 湯川における月別釣魚者の推移

(4) 釣りカードによる釣魚者組成

本会では、釣魚者の実態を把握するため、毎年釣魚者に対し住所（都道府県名のみ）、氏名、釣り方等記載する簡単なアンケート形式の釣りカードの記入を釣魚券購入時に要請し、その結果を表-5にとりまとめた。本年度は8,254枚を回収し（釣魚券購入者比76.17%）た。回収率は昨年より2.57ポイント増となった。

表-5 釣りカードの回収枚数

年 度	16	17	18	19	20	21
回収枚数	6,707	9,147	8,980	8,316	7,912	8,254

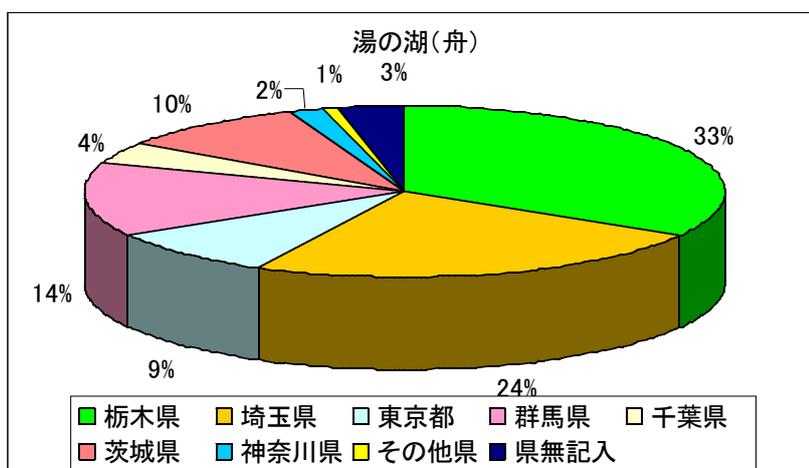
1) 都県別組成

都県毎の釣魚者の割合を図-5に示した。湯ノ湖を利用した釣魚者の数は、船釣りでは栃木県、埼玉県、群馬県、茨城県、東京都、千葉県、神奈川県の間となった。埼玉県を抜いて栃木県がトップになり、茨城県と東京都が入り替わった。岸釣りでは、栃木県、埼玉県、群馬県、東京都、茨城県、千葉県の順で、前年から順位に変動はなかった。

湯ノ湖全体をみると、昨年同様、栃木県が35%（前年30%）、埼玉県22%（同25%）と上位2県で57%（同55%）を占め、全体の6割弱がこの2県からの釣魚者であった。その他は、群馬県13%（同15%）、東京都10%（同10%）、千葉県5%（同5%）、茨城県10%（同8%）、神奈川県2%（同3%）、その他（県名無記入を含む）5%（同4%）となった。今期の湯ノ湖は、昨年と比較して栃木と茨城の2県が増加したが、他の都県では横ばい減少となり、特に栃木県の増加が目立った。

湯川では、このところ1位の座を守ってきた東京都が2位になり（20%、前年23%）、変わって、埼玉県が1位（21%、前年22%）になった。3位が栃木県17%（前年17%）、4位が群馬県（10%、前年8%）で、これに続いて茨城県（9%、前年7%）、千葉県（8%、前年6%）となった。湯川の釣魚者は、前年より減少しているが、茨城、群馬、千葉の3県は前年よりも増加している。

湯ノ湖（舟・岸）、湯川ともに共通しているのが、茨城県の釣魚者が増加していることである。これは北関東自動車道の栃木－茨城間が、平成20年12月20日に開通したことが影響しているものと思われる。



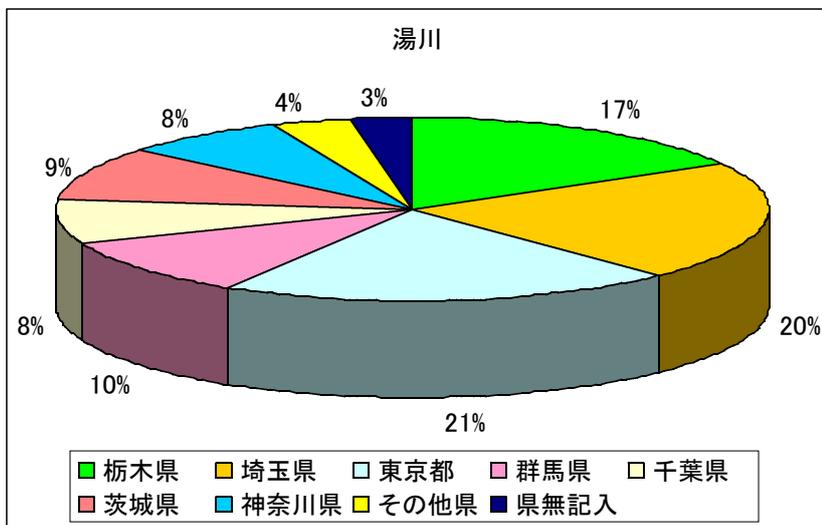
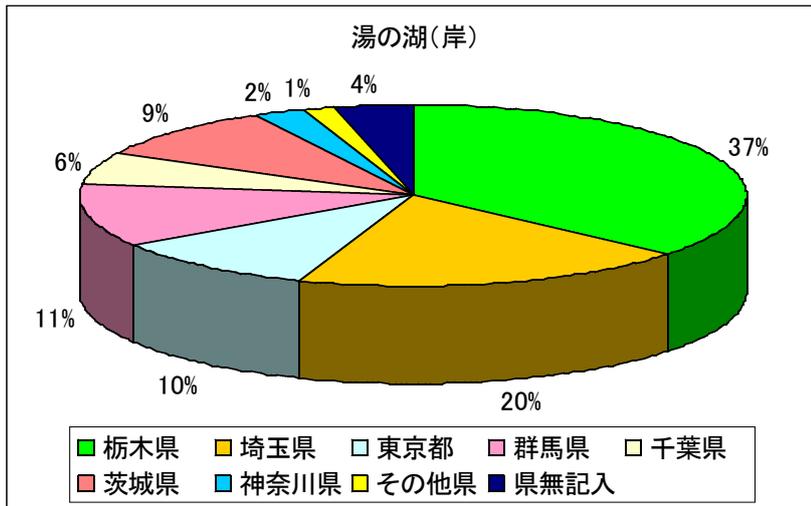
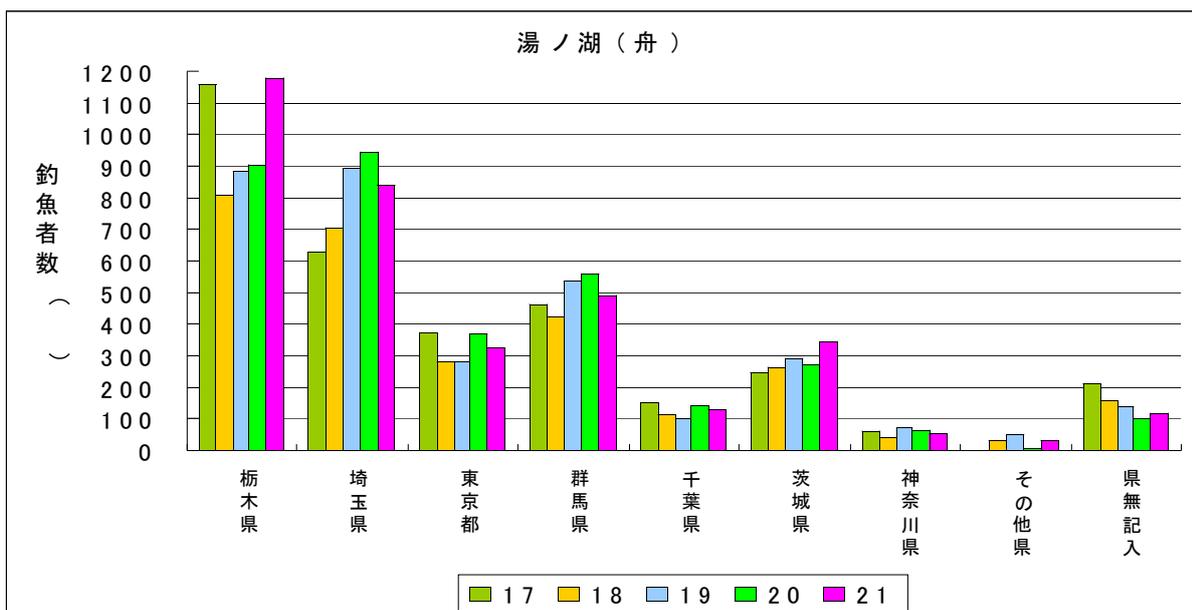
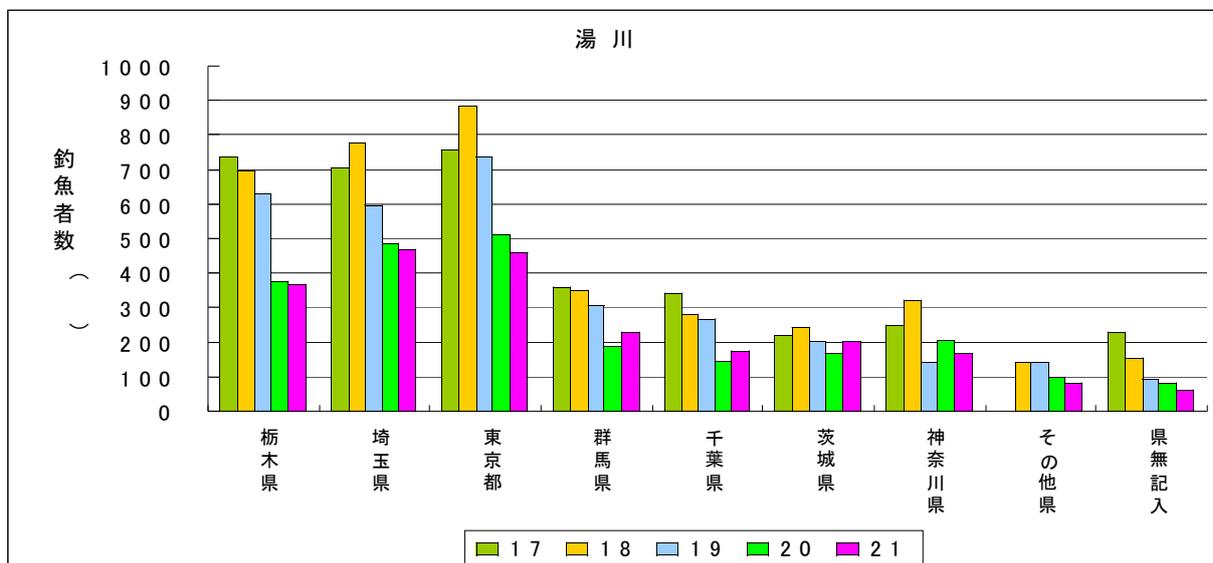
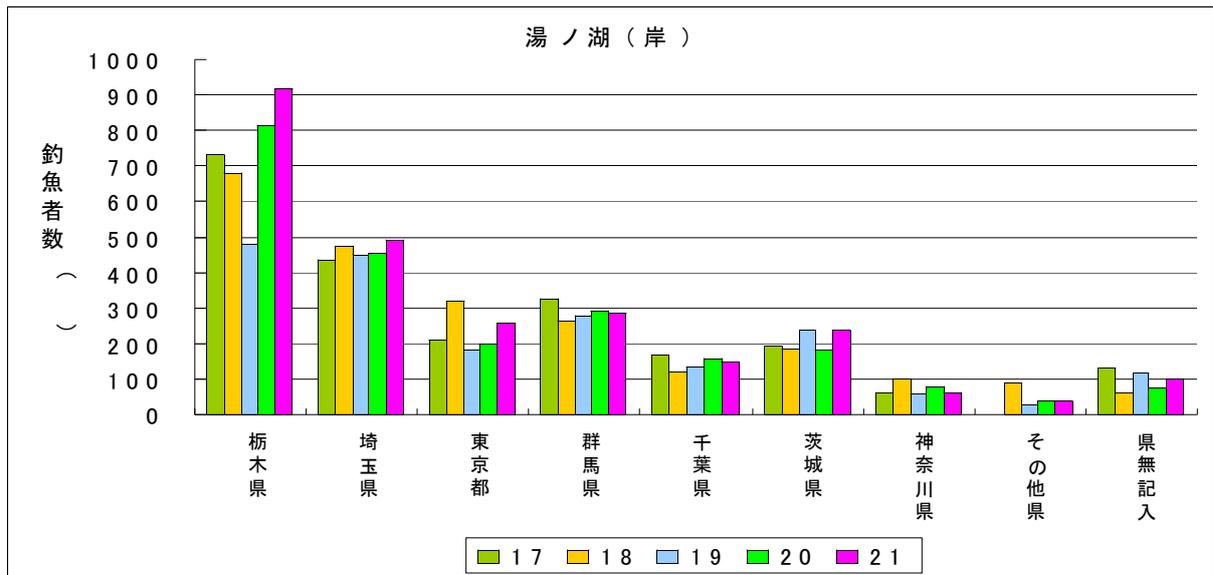


図-5 釣り場毎の都県別組成





※ 17年度は、「その他の県」と「県無記入」をまとめて「その他」としていたので、両者を「県無記入」として扱った。

図-6 都道府県毎の釣魚者数の変化

2) 釣り方別組成

都道府県ごとの釣り方別釣魚者数を表-6に示した。釣り方が無記入のものを除いて、釣り場ごとの釣り方について、釣り方を1種類のみ回答している釣魚者について見ると、次のような傾向がある。

湯ノ湖(舟)では、餌釣りが52%(前年55%)で、次いでルアー釣りが22%(前年19%)、フライが6%(前年7%)であった。群馬県からの釣魚者に餌釣りの傾向が強いのは例年と同様である。

湯ノ湖の岸釣りでは、ルアー釣りが39%(前年40%)、餌釣りが23%(前年23%)、フライが24%(前年22%)と、前年とほぼ同じ結果であった。

一方、全域がキャッチアンドリリース区域である湯川では、例年、フライ釣りが主流となっており、本年度も、フライが84%(前年84%)、ルアーが11%(前年10%)、餌釣りが

2%（前年2%）と、前年とほぼ同じ組成であった。また、群馬県からの釣魚者の5%（前年6%）が餌釣りをを行い、東京都の0.8%（前年0.5%）、他県の1.5%（前年2%）以下と大きな違いを見せた。

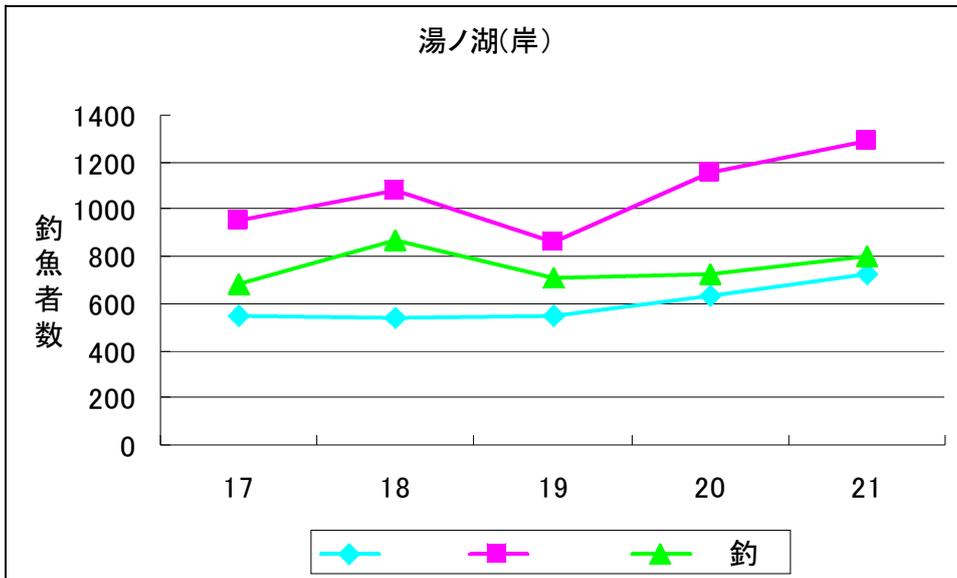
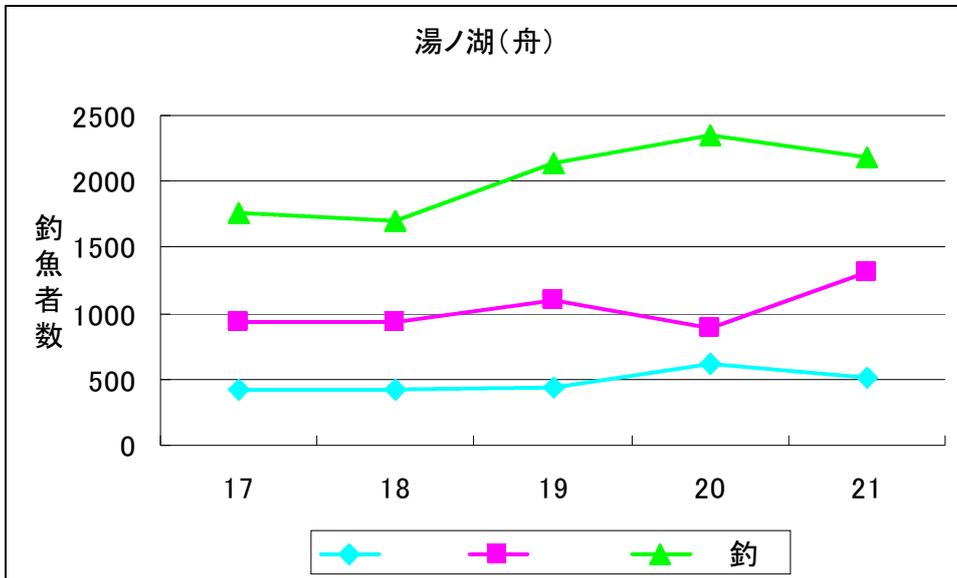
平成11年頃までは、餌釣りが主流であったが、12年頃からフライやルアーの釣魚者の占める割合が増えつつある。湯ノ湖（舟）は、ヒメマス釣りが主体のためか、現在も餌釣りが多いが、湯ノ湖（岸）は11年には餌釣りが半分を占め、ルアーは最も少なかったが、ここ数年はルアーが最も多い傾向にある。湯川についても、11年頃まではフライが6割で、餌釣りとルアーが2割ずつであったが、12年からフライの釣魚者が占める割合が急激に増えた。それに伴って釣魚者数が増え、14年以降は4,000人を超える釣魚者が湯川を訪れるようになったが、この3年くらいはフライフィッシングの人气が低迷し、釣魚者が大幅に減りつつある。

表-6 都県毎の釣り方別組成

舟	栃木県	埼玉県	東京都	群馬県	千葉県	茨城県	神奈川県	その他県	県無記入	合計
フライ	91	42	28	17	5	17	9	8	9	226
ルアー	316	120	92	78	32	91	20	6	22	777
エサ	515	575	125	321	54	170	10	7	40	1817
ルアー エサ	115	43	27	47	0	36	7	3	6	284
フライ ルアー	79	15	35	8	27	14	6	2	10	196
フライ エサ	14	4	5	3	0	4	1	1	2	34
フライ ルアー エサ	23	13	6	1	2	2	0	4	0	51
釣り方 無記入	28	26	5	14	10	12	1	0	28	124
合計	1181	838	323	489	130	346	54	31	117	3509

岸	栃木県	埼玉県	東京都	群馬県	千葉県	茨城県	神奈川県	その他県	県無記入	合計
フライ	204	107	64	79	44	70	13	7	15	603
ルアー	405	184	101	90	44	79	31	15	33	982
エサ	172	129	52	69	37	67	12	13	27	578
ルアー エサ	81	50	24	13	12	10	2	1	3	196
フライ ルアー	35	7	10	29	6	1	2	0	5	95
フライ エサ	4	2	2	1	0	0	0	0	0	9
フライ ルアー エサ	4	2	0	2	3	3	0	1	1	16
釣り方 無記入	12	11	5	2	1	8	2	0	14	55
合計	917	492	258	285	147	238	62	37	98	2534

川	栃木県	埼玉県	東京都	群馬県	千葉県	茨城県	神奈川県	その他県	県無記入	合計
フライ	297	433	421	164	138	167	149	79	30	1878
ルアー	52	28	23	56	22	32	14	2	11	240
エサ	6	0	1	8	5	3	0	0	1	24
ルアー エサ	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
フライ ルアー	3	5	7	1	2	1	5	0	3	27
フライ エサ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
フライ ルアー エサ	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9
釣り方 無記入	1	2	6	0	6	0	0	0	15	30
合計	368	468	458	231	173	203	168	82	60	2211



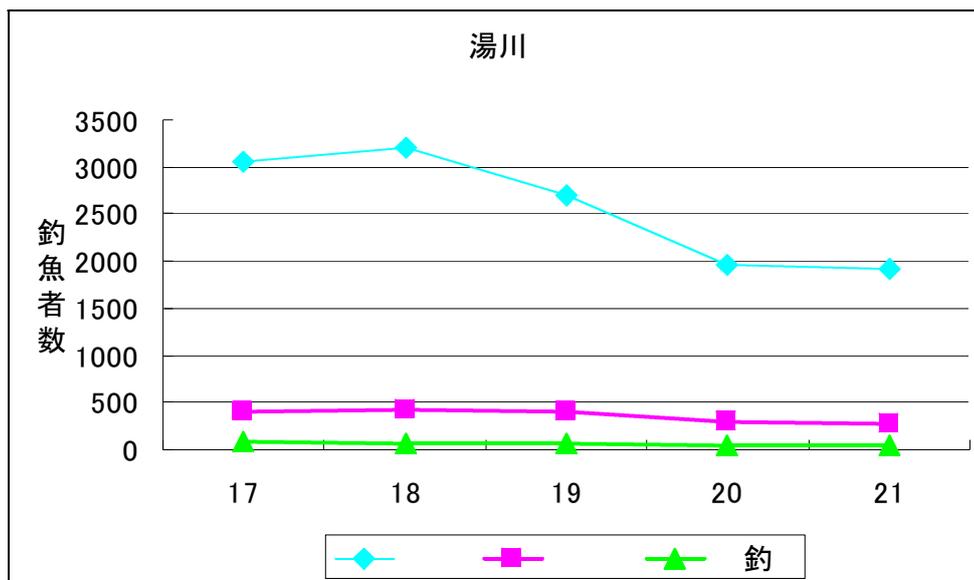


図-7 釣り方別の釣魚者数

(5) 湯ノ湖における成魚放流

湯ノ湖にはニジマスとカワマスを放流した。本年度の成魚放流実績を表-7に示す。湯ノ湖へニジマス5,110kg（前年5,140kg）、カワマス233.9kg（前年405kg）の放流を行った。放流は、原則として土曜と日曜の週2回と祝日とし、状況に応じ多少増減させた。更に、放流当日の天候、休祝祭日等を考慮し、放流時刻、放流場所等、適宜変更して実施した。

なお、湯川では、平成14年に全区間でキャッチ&リリースとなってから、放流を行っておらず、本年度においても行っていない。

表-7 湯ノ湖における放流量

	小 型	大 型	計
ニジマス	3, 850 kg	1, 260 kg	5, 110 kg
	21, 176 尾	1, 550 尾	22, 726 尾
カワマス	200 kg	33.9 kg	233.9 kg
	4, 000 尾	113 尾	4, 113 尾
計	4, 050 kg	1, 293.9 kg	5, 343.9 kg
	25, 176 尾	1, 663 尾	26, 839 尾

(6) 湯ノ湖における稚魚放流

6月25日に、ヒメマス6,610尾、ホンマス6,577尾を放流した。7月6日に9,700尾、7月7日に8,700尾のヒメマス稚魚を放流した。禁漁後の10月2日には、5,931尾のヒメマス稚魚を放流した。ヒメマスの放流は、中央水産研究所が実施する種苗強化試験のため

めの放流で、全個体に標識を行っており、その作業にも協力した。

(7) その他

1) 中央水産研究所内水面研究部が行う普及啓蒙活動への協力

中央水産研究所内水面研究部が主に学童を対象に実施している採卵体験学習（11月14日）への協力や、同部が毎年実施している一般公開（8月6日）への積極的な対応を行い、内水面漁業への理解や知識の普及に努めた。

2) 「湯川倶楽部」の活動

湯川の環境保全に関心を持ち、清掃活動などに参加する意思のある人で構成する会で、今年で結成8年目になる。本年度は新たに21名（前年度18名）の参加があり、総勢261名となった。釣りシーズン後の10月3日に、2-（1）に記述の、湯川倶楽部会員を主体とした「リバークリーンと意見交換会」を行った。

3) ホームページの活用

全国内水面漁連のホームページに「奥日光トラウトフィッシング 湯ノ湖・湯川」の項を設けており、解禁情報及び釣り大会やリバークリーンの開催や釣果速報の最新情報等の発信を行ったほか、禁止事項など注意事項の啓発を図った。

付表 有料釣魚者数の推移

	湯の湖（前年度比）	湯川（前年度比）	総計（前年度比）
平成元年	9,648（4.3%）	2,089（-3.0%）	11,737（3.0%）
2	11,036（14.4）	2,458（17.7）	13,494（15.0）
3	8,565（-22.4）	2,567（4.4）	11,132（-17.5）
4	12,168（42.1）	2,941（14.6）	15,109（35.7）
5	14,297（17.5）	2,633（-10.5）	16,930（12.1）
6	15,546（8.7）	2,503（-4.9）	18,049（6.6）
7	18,725（20.4）	2,990（19.5）	21,715（20.3）
8	23,043（23.1）	3,243（8.5）	26,286（21.0）
9	23,331（1.2）	3,487（6.2）	26,813（2.0）
10	19,944（-14.5）	3,568（2.3）	23,512（-12.3）
11	17,900（-10.2）	3,954（11.0）	21,854（-7.1）
12	14,055（-21.5）	3,570（-9.7）	17,625（-19.4）
13	11,704（-16.7）	3,574（0.1）	15,278（-13.3）
14	9,857（-15.8）	4,554（27.4）	14,411（-5.7） *注1
15	8,509（-12.7）	4,831（6.1）	13,340（-7.4）
16	8,319（-2.2）	4,408（-8.8）	12,727（-4.6）
17	7,858（-5.5）	4,532（2.8）	12,390（-2.6） *注2
18	7,118（-9.4）	4,801（5.9）	11,919（-3.8）
19	7,220（1.4）	3,964（-17.4）	11,184（-6.2）
20	7,432（2.9）	3,318（-16.3）	10,750（-3.9）
21	7,704（3.7）	3,132（-9.4）	10,836（1.0）

* 注1：平成14年から女性・子供券がなくなり、小学生以下が無料となったことから、小学生以下の釣魚者数は不明。

* 注2：小学生以下の釣魚者数把握のため、平成17年度から子供券を発券（料金無料）した。平成17年以降の子供券発券枚数は、次のとおりである。

年度	17	18	19	20	21
発券枚数	781	927	964	957	980